一級へ　伊藤健治、直木　榮、山川　昇、小柳　博、山本　齊

○五月八目の進級者

二級へ　細田　豊、吉田戒三、阿部秀助、阿部芳郎、高田待雄、高田庫重、菅原　卓、長塚龜三郎、菅原茂太郎（編入）

田丸鎭雄（編入）

一級へ　齋藤三郎

○五月十九日講道館春季紅白勝負の結果

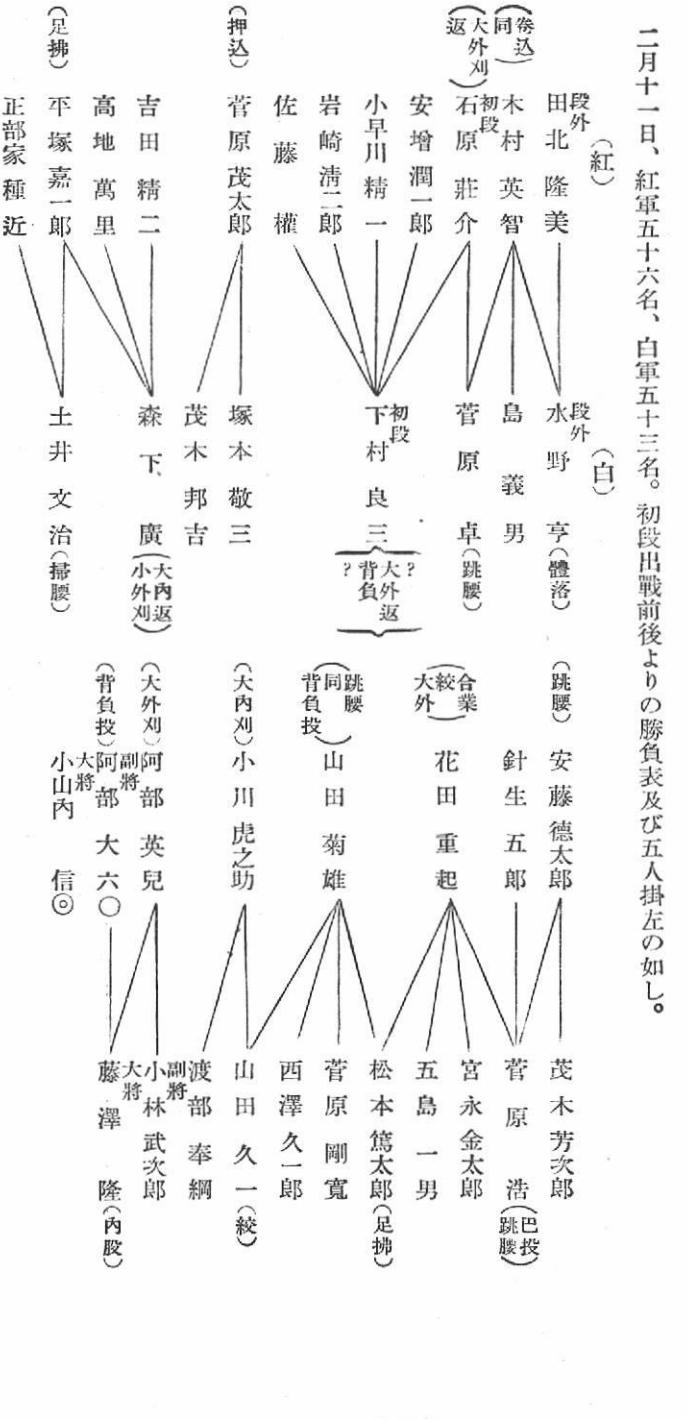
初段へ　柿元　魁

二三　大正八年史

前年度までの部史を編纂するに、既に多くの時日を費した。大正八年以後に至つては、四段三段の巨豪最も多く輩出したのである。隨つて幾多の興味ある記錄に富んでゐなければならぬ筈であるが、實際は之に反し、今日存するものは唯勝負表のみに過ぎない。其他年中行事或は種々の會合に就ても、寄稿を得たるもの以外、時に斷片的記事に接するだけである。左れば本年度以後最近に至るまでは、史錄殆ど勝負表に終始し、千變一律の觀あるを免れない。然れども其の間各時代に活動せる部員にして之を見なば、當時の模樣自ら胸中に湧き來るであらう。編者敢て之に蛇足を添へざる所以である。讀者幸に諒せられんことを。（尙勝負等に就ては、その重なるもののみを掲載するに止むることとした。又『進級一括』の中に昇段者の記錄なきは殊に遺憾である。）

（一）卒業生送別紅白勝負

二月十一日、紅軍五十六名、白軍五十三名。初段出戰前後よりの勝負表及び五人掛左の如し。



五人掛

三段　徳永秀夫　○○○○●

- ●初段　平塚嘉一郎（合掌）
- ●同　佐藤權（跳腰）
- ●同　吉田精二（跳腰）
- ●同　岩崎清二郎（返技）
- ○二段　松本篤太郎（○押込）

四段　石渡泰三郎　○○○×

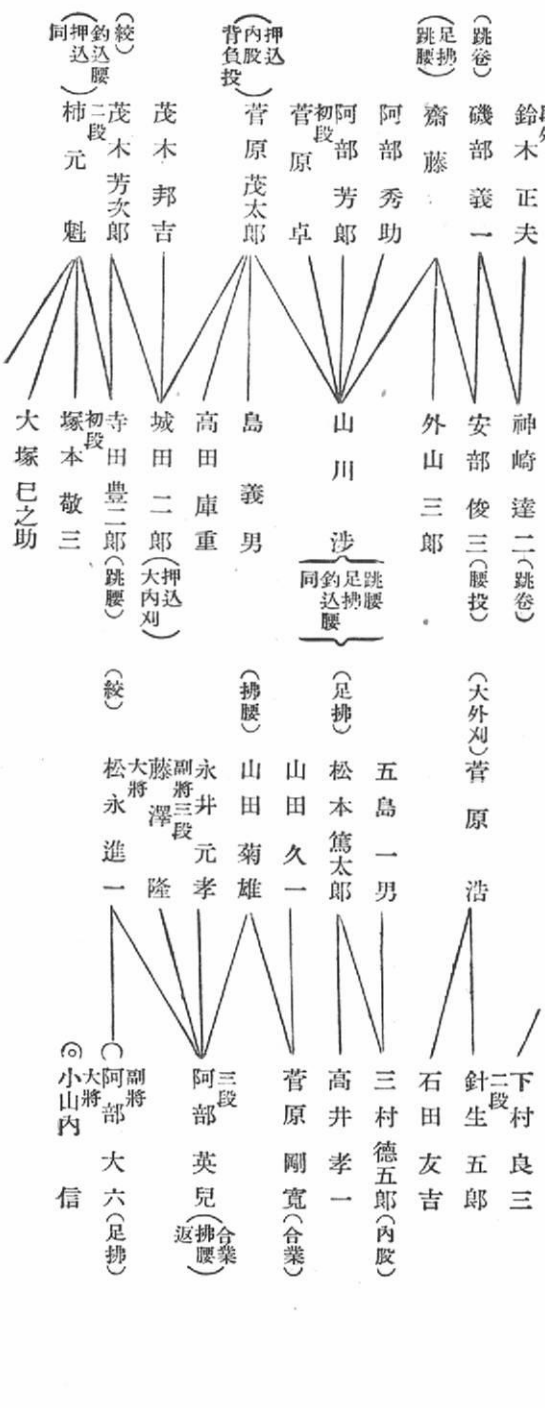
- ●初段　山川渉（足拂）
- ●二段　宮永金太郎（裏投）
- ●同　針生五郎（絞）
- ×同　菅原浩（引分）
- 三段　小山內信

五段　中野正三　○○○○×

- ●二段　渡部奉綱（內股）
- ●三段　阿部英兒（大外刈）
- ●同　阿部大六（背負投）
- ●同　藤澤隆（逆）
- ×同　小山內信（引分）

（二）新入部員歡迎紅白勝負

五月四日、紅軍四十三名、白軍四十四名。初段出戰前後よりの勝負表を左に揭ぐ。



(三) 對四校聯合勝負

六月一日午後綱町道場に擧行。聯合軍側八十九名、塾方九十三名、引分に了る。

勝負は段外四分、初段五分、二段六分、副將十分、大將十五分。

（聯合軍）

段外 青木 文平（農）
初段 天野 逸人（農）
（大外刈 十字絞） 奥津 三郎（水）
寺田
山中 良造（農）
（背負投 同） 茂木 邦吉（農）
（大外刈 跳腰） 網谷 力雄（工）
寶田 顯作（水）
鈴田 茂樹（農）
日高 久彌（水）

（本塾）

初段 菅原 卓
菅原茂太郎（押込）
大塚巳之助
長谷川 彌馬太（跳腰）
安增潤一郎
土井 文治（押込）
瀧川 純三
遠藤 昌
西岡 誠二
木下 米松（跳腰）

高 政治（農）
柴田 武雄（農）
本間 嘿（水）
佐伯 恒夫（農）
二段
（大外返） 川村新太郎（工）
（内股） 菅井 操（農）
加藤 孝淳（目）
副將 松田重勇貴（工）
大將 廣瀨 恒美（水）
星子 廉義（農）

森下 廣
二段
菅原 浩
（巴投 大外刈 巴投）
松本篤太郎（腕逆）
柿元 魁
渡部 奉綱（跳腰）
副將 山田 菊雄
大將 永井 元孝

（四）月次勝負

本年數回の月次勝負中六月六日には、多數の有段者の試合も行はれた。茲に初段以後の分（最初の三組は一方は段外者）を記せば、左の通りの成績であつた。

（初段）

（一）○○（段外）木村英智（押込逆）
（初段）大塚巳之助

（二）○○（段外）木村英智（拂腰同）
（初段）長谷川彌馬太

（三）×（段外）木村英智
（初段）七條清則

（四）○○（初段）土井文治（押込同）
（同）七條清則

（五）○（初段）土井文治
（同）遠藤昌（足拂）

（二段）

（六）×（初段）遠藤昌
（二段）菅原浩

（七）○○（二段）菅原浩
（二段）柿元魁（大外刈同）

（八）○（二段）柿元魁
（二段）安藤德太郎（背負投）

（九）○（安藤德太郎
針生五郎（跳腰）

（一〇）○（針生五郎
五島一男（内股）

（一一）○（五島一男
三村德五郎（押込）

（一二）○（三村德五郎
松本篤太郎（押込）

（一三）○○（松本篤太郎（肩車）
菅原剛寛（押込同）

（一四）○○（菅原剛寛
小林武次郎（大腰同）

（一五）○○ 小林武次郎
渡部奉綱（押込大外刈）

（三段）

（一七）○ （二段）山田菊雄
（三段）渥美得一（返技）

（一八）○ （三段）渥美得一
（三段）阿部英兒（拂腰）

（一六）○○ 渡部奉綱
山田菊雄（拂腰同）

（一九）× 阿部英兒
小山内信

（二〇）× 小山内信
阿部大六

（二一）× 阿部大六
藤澤隆

（二二）× 藤澤隆
松永進一

（五）關西遠征の思出

松永進一

大正五年及び大正六年の關西遠征の結果、柔道部は外的刺戟に依つて非常な活氣を帶びて來たと同時に、柔道でもやらうと云ふ位の元氣ある若者の集ひの當然の要求として、柔道部幹事選擧の制度（從來は推薦制）に關する運動が、普通部出身者以外のグループを中心として起つた。私は當時柔道部の責任者だと心得て居たので、此の運動の意味は充分諒解して居たが、如何考へて見ても、先輩諸兄から傳統的に受繼で來て居る推薦制度の方が、塾の柔道部らしい樣な氣がしたので、此れには贊成出來なかつた。追々輿論が八釜しくなつて來たので、遂に有段者會を開いて衆議に問ふ事になつた。其結果は矢張り從來通り推薦制でやる事に決したのであるが、如此問題が起つたのは、道場内の雰圍氣の單に一つの現れで

有つて、根本は自分の不徳の致す所だと悟つて居た私は、折角盛んになつて來た柔道部の進展を、つまらない内輪もめの爲に打ち毀されては、光輝ある歴史に對して申譯がないと、私かに心を痛めて居たのであつた。所が丁度其時、新進氣鋭の中堅、阿部大六、阿部英兒、菅原浩、松本篤太郎、宮永金太郎の諸君が、對校勝負か關西遠征の復讐戰を是非やらうと盛んに熱望して來た。私は此の機會に一つ強敵を目標として、内部の結束を固め、更に塾の柔道部の眞價を天下に知らしめる事が、塾の柔道部の今進むべき唯一の途で有ると考へたので、先づ飯塚先生、中野助手、小山内信、藤澤隆、菅原剛寛の諸君に諮つた處、皆よからうと云ふ事で、早速有段者會を開いて相談をしたが、一同異議なく賛成して呉れた。

そこで大正八年第一學期の始め頃、早稲田、帝大の陣容を調べた所、帝大は餘り盛んならず、早稲田は選手の資格範圍に就て難色あり、結局高師が好敵手でもあり、往年惜敗の復讐戰ともなる事とて交渉を開始する事になつた。然るに前後三回に亙つて、先方の橋本、倉田兩君と會見の結果は、殘念乍ら選手の人數の點で不調に終つた。高師方は最初二十名を主張したが、塾の方は五十名を主張した。最後の會見では、先方は三十名を最大限度とする旨を申し出たので、當方も忍び難きを忍んで、四十名迄讓歩したが、其間の開き餘り大きく、不調に終るべきを豫期しつゝ、最後の回答を留保して別れた。思ふに此の交渉は、最初から不調に終るべき運命にあつた。如何とならば、塾方は第三學期の終り頃から、此秋は何かやらうと云ふ氣運が動いて居た爲め、一級以上の約六十名は稽古を一生懸命にやつて居たので、三段も二段も初段も一級も、他の其れと比較して、毫も遜色がないと私は信じて居たから、私の立場としては、此の内の一人でも選手から漏らす事は非常な苦痛で有つた。出來るなら六十名全部と願つて居たのである。故に前記對高師との交渉の顚末並に私の心中を披瀝して、有段者會に諮つた所、滿場一致で中止賛成に決し、此れに代ゆるに關西遠征を以つてすべし、と云ふ事に一決した。

斯くて高師には中止の已むなき次第を回答すると同時に、改めて飯塚師範、中野助手、青木會長先輩中村様の御賛成を

得て、京都武德會、大阪武德會に挑戰狀を發し、九月中に試合の事に快諾を得て、道場內は一段と活況を添へ、人の和は天の時地の利に優る喩の通り、此の時旣に勝運は芽へて居た。云ふ迄もなく關西遠征の相手方は、オール京都とオール大阪であるから、人數の點に於ては懸念なく約五十餘名の誰れもが、我これ天晴れ慶應柔道部の名譽ある關西遠征の選手なりとの自覺を以つて、心身の練磨に精進したのである。一學期も追々終りに近づき、暑さは日增しに加はるが、道場の盛況は衰へる色なく、此のまゝ暑中休暇になつて、二ヶ月間別れて日を送るのは惜しいと云ふ氣分が、誰の頭にも浮んで居たものか、誰云ふともなく、有志だけでもいゝから葉山の水泳部の寄宿舍に合宿して、午前中は鎌倉師範の道場で稽古を勵み、午後は相模灘で水泳をやらうと云ふ事になり、節制ある合宿生活が始まつて、愉快な二週間は夢の樣に過ぎ、七月末各自關西遠征の終る迄は、身を大切に仕樣と堅く約束して、御機嫌樣に托して暫時の別れを惜しんだ。

暑中休暇を心身の練磨に任せて、九月一日三田道場に集まつた者五十餘名の內、事情の許す限り體育會ホールに合宿する事とし、愈々最後の猛練習が始まつた。油の乘り切つた時は氣持ちの良いもので、愈々出發の數日前に、四十九名の精銳は全く氣合ひが一致して、一人の樣になり、道場內には藥にしたくも不平不滿はなく、名實共に我柔道部の傳統的精神たる和氣靄々裡に、一糸亂れざる統制が自然に出來て居た。當時私は、關西遠征の結果は未だ大丈夫だとは自信が持てなかつたが、柔道部の歷史の中に、此の尊い氣分に滿ちた一ページが皆の力に依つて揷しはさまれた事は、何物にも代へ難い悅びで有つたと同時に、私の學生時代の最も愉快な思出の一つとして、今でも當時を追想する每に、犇々と胸に迫る或者を覺える。

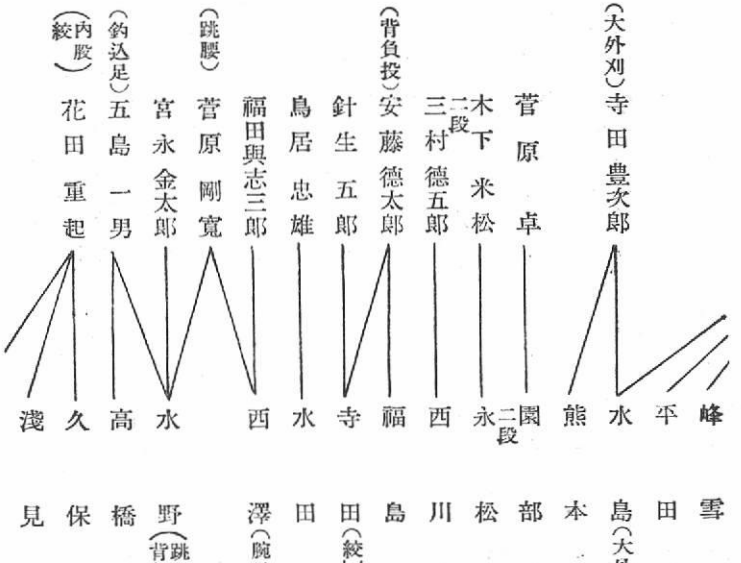
出發の日は道場に一同勢揃ひして、東京驛頭では先輩並に體育會の連中の聲援に送られ、必勝の意氣凄まじき飯塚師範、中野助手の外、四十九名の精銳を關西に送る列車は、靜かに動く。

京都停車場に着くと、先輩吉武樣が大阪からわざわざ出懸けて來られ、自分の弟達を出迎へでもする樣な態度で、一同

をステーションの二階食堂に招じ、京都の町を眼下に見下して前祝ひと稱し、キリンビールの乾盃を擧げ乍ら『諸君既に勝算あらんも、更にキリンを飲んでかゝれ、戰に臨んで氣遲れしてはならんぞ』に力附けられた事は、難有い事として今尙ほ記憶に殘つて居る。

一、對オール京都（武德會本部）試合

（大外刈）寺田豊次郎　峰雪
平田
水島（大外刈）
熊本
菅原卓　園部
木下米松　二段　永松
三村德五郎　西川
（背負投）安藤德太郎　福島
針生五郎　寺田（絞）
鳥居忠雄　水田
福田與志三郎　西澤（腕逆）
（跳腰）菅原剛寛
宮永金太郎　水野（跳卷背負投）
（釣込足）五島一男　高橋
（内股絞）花田重起　久保
淺見

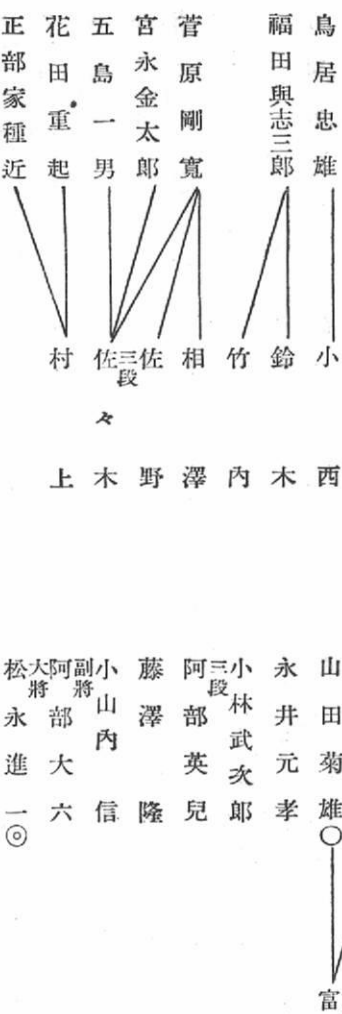


正部家種近　山下（左内股大外刈）
（大外刈）菅原浩　赤川（絞）
（腕逆左拂腰）松本篤太郎　楢崎
（袈裟固）小川虎之助　牧瀬（袈裟固）
石田友吉　山本（小内刈小内返）
（上四方）柿元魁　三段　鈴木
山田久一　田中
渡部奉綱　河野
（拂腰）山田菊雄　瀧本
永井元孝　副將　滋賀（拂腰返袈裟固）
小林武次郎　三段　阿部英兒　大將四段　山口
藤澤隆
小山内信　副將　阿部大六　大將　松永進一◎

二、對オール大阪（武德會支部）試合

（塾方）　（大阪方）

段外 松井武一郎	段外 國川
高田庫重	西部
石川勝夫	光江
	石橋
高田待雄	
阿部秀助	富田
直木榮	
初段 菅原茂太郎	中濱
島田久亮	松本
	井邊
塚本敬三	谷口
	柴野
島義男	龜井
田中健吉	城山
木村英智	田中
大塚巳之助	松田
土井文治	
清水行信	島
城田二郎	初段 黑田
菅原卓	矢崎
	津田
庄野英樹	堀野
長谷川彌馬太	土肥
	木村
	中川
山川渉	中津
	足助
	中本
寺田豐次郎	豊島
	山本



此の如くして京都では、味方の五將阿部英兒君が、敵の大將と引き分け、四將を殘して勝ち、大阪では八將山田菊雄君が、敵の大將を斃して大勝し、玆に完全に遠征軍は其使命を果して、慶應義塾體育會柔道部の眞價を天下に知らしめた。勝利の悲哀を感ずる位に悦んだ選手達は

風颯々の武藏野に……

の部歌を合唱し乍ら、氣持よく關西方面の先輩諸兄の御心盡しの祝勝會に臨んだ。

斯くして一ケ年餘の間鍛へに鍛へた腕の力も試し終つて、孰れも止め度無く込み上げて來る悦を、勝つて兜の緒を締めよの諺に秘めて、意氣揚々と東京に引き揚げた。東京驛頭には早くも我等の快勝を聞き知つて、先輩岩崎清一郎君始め、柔道部の留守軍、並に體育會の諸君が、花輪を持つて悦んで迎へてくれた。

却說私は靜かに戰の跡を省て、よくあれだけの大試合が永い準備時代から終りまで、大過なく成功した事を天に感謝すると共に、指導者たる飯塚師範、中野助手は固より、更に先輩諸兄が我事の如く、精神的に將又物質的に御後援下された事が、どれだけ我等選手を感激せしめたかを熟知すると共に、選手諸君が不肖松永を中心として一致團結し、過去一年半に涉り、立派にスポーツマンとしての節度ある訓練を積まれ、試合に臨んでは『斃れて後已む』の氣魄を以つて終始し、大阪の試合の時抔は庄野君の如き、敵に逆手を捕られて參つたと云はず、遂に腕が拔けても尙ほ審判が勝敗を宣する迄是を耐へ忍んだ。又安藤君の如きは、締められても遂に手を打たず、反つて相手が驚いて審判を呼んだ事等、試合中の眞劍さは各人が此通りで、前記二君の如きは單に一例に過ぎず、自分の前に出た者がやられたら、必ず此れを斃さねば止まぬと云ふ意氣込で戰つたればこそ、此尊い勝利をかち得る事が出來たのである事を、選手諸君に心から感謝しなければならないのである。

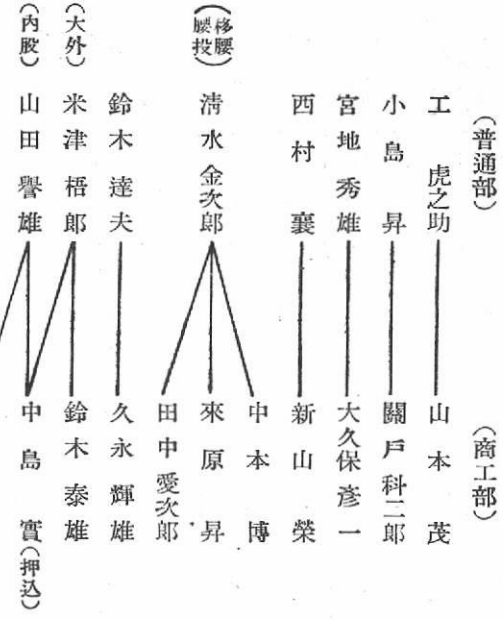
あれから十數年を經た今日、東京に着いた其足で、感激に滿ちた四十九人が、成瀨寫眞館に直行して撮影した眞劍味の溢れた記念寫眞を見ると、自然に涙が浸じんで來るのを覺える。（口繪參照）

（六）第二十九回大會

十月三十一日

普通部對商工部試合

（普通部）　（商工部）



對外三本勝負

（有級者）

◎（農大）（一）○ 伊藤（大外返跳腰）
横河（足拂）

（農大）（二）○○ 吉保
新見（足拂同）

○（日大）（三） 小林（跳腰）
飯塚

（講）（四）○ 夏目
幸田（大外）

（日宗）（五）× 田津
鈴木

○（附中）（六） 大石（押込）
古田

◎（高輪）（七） 三瓶（小内刈大外刈）
磯部

（日宗）（八）○○ 中井
高田（大外同）

（附中）（九）× 石上
渡邊

（日宗）（一〇）○ 大森
野崎（跳腰）

（水産）（一一）× 渡邊
松井

◎（學習）（一二） 佐々木（背負同）
石居

◎（深田）（一三） 倉谷（巴投同）
石川

（高輪）（一四）× 宮原
鈴木

（講）（一五）× 高須
谷村

（大成）（一六）× 夏秋
神崎

（大成）（一七）○○ 田中
竹内（大外同）

（農大）（一八）○ 青木
高田（庫）（押込）

（拓大）（一九）○○ 中尾
直木（大外同）

（水産）（二〇）× 岩田
阿部（秀）

（駒場）（二一）× 阿部
佐藤

（有段者）

◎（一高）（二二）
尾高（右大外刈、同）
島

◎（拓大）（二三）○
生松（絞、同）
水野（跳腰）

（農大）（二四）×
佐伯
遠藤

（日宗）（二五）○
高
塚本（大外刈）

（外語）（二六）○
小田
大石（大外刈）

（獨協）（二七）○
莊田
木村（押込）

（農大）（二八）×
山中
森下

（農大）（二九）○○
鈴田
長谷川（絞右跳腰）

（講）（三〇）○
梶野
土井（押込）

○（水産）（三一）
奥津（大外刈）
下村

（講）（三二）○
杉原
寺田（大外刈）

◎（明大）（三三）○
中島（大内刈同）
木下（裏投）

○（高工）（三四）
周田（大外刈）
菅原（茂）

○（日大）（三五）×○
山木（大外刈）
菅原（卓）（押込）

（早大）（三六）×
杉山
針生

○（講）（三七）
宍倉（押込）
安藤

（學習）（三八）×
山縣
宮永

（講）（三九）×
佐藤
三村

（高工）（四〇）×
河村
山川

（水産）（四一）○○
永井
花田（絞大外刈）

（高工）（四二）○
松田
正部家（内股返）

（駒場）（四三）○
梅津
小川（大内刈）

○（明大）（四四）×○
藤島（内股）
山田（足拂）

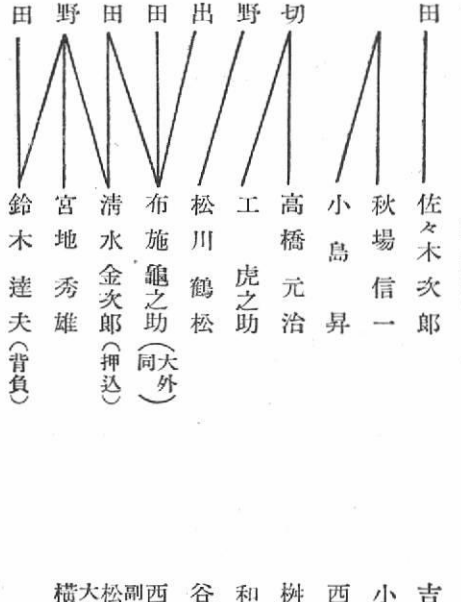
（明大）（四五）○
金丸
山田菊（拂腰）

○○（講）（四六）
青木（足拂押込）
藤澤

（七）雜記

攻玉舍對普通部試合

六月二十一日、攻玉舍軍は總勢十八名（大將横田、副將松崎）、綱町に押寄せたが、我が普通部は菅原卓、阿部芳郎を大副將として之に對戰、塾方の三將山川涉大に力戰し、敵の三將より大將までを投げ倒して大勝を博した。



進級一括

○五月十九日附進級者

二級へ　白仁　泰、稻田　勇、小原勝守、村上三郎、佐藤正敬、山田長一（編入）

一級へ　磯部義一、齋藤孝平（以上編入）

○十月三日月次勝負の結果

二級へ　谷村純吉、平田次平、渡邊三郎、山田譽雄（編入）、田中達一（編入）

一級へ　佐藤光潔、國頭佐三郎、幸田萬喜三、細田　豊、田村達士

○十一月二十一日月次勝負の結果

二級へ　中本　博、宮澤憲衛

一級へ　古田武太郎、鈴木正男、山本　巖、工　虎之助、鈴木清治

二四　大正九年史

（一）新入部員歡迎紅白勝負

（紅）　（白）

（押込）岩下秀三郎 ― 森野 ― 森本勇三郎

（締背負投）笹岡政勝 ― 遠山潤二郎 ― 山崎文吾 ― 野田春雄